

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：34409

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13998

研究課題名（和文）社会的養護施設における「家庭的養育」のあり方と職員の専門性の解明

研究課題名（英文）Staff's professionalism and practice of family-like care in Residential child care home

研究代表者

奥井 菜穂子（高橋菜穂子）（Nahoko, OKUI）

大阪樟蔭女子大学・児童教育学部・准教授

研究者番号：90718298

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では次の通り、社会的養護における「家庭的養育」の現状と課題を職員の専門性に基づき解明した。（1）乳児院・児童養護施設でインタビューを行い、個別的養育と共同的養育の関係、退所後の子どもの将来を見通す長期的視点、コロナ禍に施設が直面した課題について明らかにした。（2）フランスの子育て支援施設を視察し養育者の社会的つながりを創出して孤立を未然に防ぐsocialization及びpreventionの実践をめぐる示唆を得た。（3）保育士の行う福祉的实践について整理するとともに、保育士養成課程における保育ソーシャルワークの指導法について調査し、施設保育士の専門性発達のあり様を分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、施設における職員の専門性を再評価し、血縁関係にない養育者と暮らす子どもへのケアの本質を明らかにした点にある。国内の社会的養護施設の職員へのインタビューを重ね、またフランスにおける先駆的事例の調査を進め、社会的養護施設において日々の養育を「家庭的」たらしめている実践、あるいはそれを困難にしている要因を明らかにし、「家庭的養育」の具体的実践像の一端を解明した。今後、里親養育と施設養育の適切な協力関係の構想が可能となり、ひいては児童福祉や近接領域（里親、ファミリーホーム、障害児入所支援、保育における福祉の支援等）の実践にも波及しうると期待できる。

研究成果の概要（英文）：This project clarified the actual situation and issues of family-like foster care in residential childcare, including its principle (what does family-like mean?) and caregivers' expertise (what is the practical knowledge supporting childcare?). 1. Interviews were conducted at infants' and children's homes to clarify (i) the relationship between the two conceptual axes of "individualized care" and "collaborative care," (ii) the perspective of long-term care for the child after leaving the home, and (iii) the challenges faced by the homes during the COVID-19 pandemic. 2. We visited a childcare support facility in France and examined the practice of socialization and prevention to build parents' social ties and to avoid their isolation. 3. We formulated the welfare practices of childcare workers, investigated the teaching methods of childcare social workers in a training course at the university, and analyzed the state of professional development of institutional childcare workers.

研究分野：児童福祉、社会的養護、社会福祉

キーワード：社会的養護 家庭的養育 子育て支援 施設保育士 専門性発達

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

本研究は、社会的養護施設における「家庭的養育」とはいかなる実践であるのかを、職員の専門性に基づいて解明するものである。長らく日本の社会的養護は、施設入所、それも大舎制の施設への入所が圧倒的多数を占めてきた。しかし、脱施設化に向けた世界的潮流の中、「社会的養護の課題と将来像」（厚生労働省, 2011）、「新しい社会的養育ビジョン」（厚生労働省, 2017）といった指針のもと、多くの社会的養護施設は小規模化に向けて舵を取り始め、施設養育におけるケア単位の縮小や、より限定的かつ専門的なケアが求められることとなった。これら一連の社会的養護の改革で再三強調されるのは、「家庭的養育」（あるいは「家庭的養護（family-like care）」）である。「家庭的養育」とは、施設において家庭的な養育環境を目指す小規模化の取り組みを指し、養子縁組や里親など家庭と同様の養育環境を指す「家庭養護（family-based care）」と対置されて使用されてきた。

しかしながら、そもそも「家庭的養育」とはいかなる実践であり、ケアの受け手である子どもがそれをどう捉えているのか、施設を小規模化すればそれは実現されるのかといった検証が十分なされているとは言い難い。「里親か施設か」といった従来の議論を超えて、子どものニーズに立った「家庭的養育」の具体的実践像こそ、提示されるべきであろう。さらに、「家庭的養育」を実践していく施設職員の専門性については、必ずしも議論が十全に尽くされてきたわけではない。すなわち、その職務には高度な実践が求められる一方、未だ「母性的養育」や「奉仕精神」といった曖昧な言葉で語られることも多い。そこで本研究では、「家庭的養育」を担う実践的技法を持ち合わせた専門家としての施設職員のあり方の一端を明らかにした。

2. 研究の目的

問い① 社会的養護施設に期待される「家庭的養育」とはどのような実践であるのか

家族像が多様化する今日、改めて、いかなる状態を「家庭」と呼ぶのか。またいかなる実践が施設を「家庭的」にするのか。その根本的な問いが、本研究の核心をなしている。

問い② 「家庭的養育」を実践していく上で、職員に必要な専門性とはいかなるものか

上記の「家庭的養育」を実践していく担い手は施設職員である。「家庭的養育」の実践を可能にする専門的技法・知識を問うことが、本研究のもう一つの核心である。

3. 研究の方法

関西を中心として、2011年以降に小規模化を行った児童養護施設および乳児院においてフィールドワークを実施し、施設職員が、子どもへのいかなる養育、あるいは子どもとのいかなる関係を「家庭的」と捉えているのかを明らかにした。具体的には、職員の専門的実践に焦点を当て、施設職員へのインタビューを実施した。方法的基盤として、ローカルな現場の文脈を深く理解するのに適した質的研究（Flick, 2002/1995）と、その理論的な支柱であるナラティブ・アプローチ（Denzin & Lincoln, 2006/2000）を用いた。これにより、実践に対する職員自身の意味づけをボトムアップ的に明らかにし、それを踏まえた専門性を提示した。

4. 研究成果

本研究は、社会的養護の施設における「家庭的養育」とはいかなる実践であるのかを、職員の専門性に基づいて解明するものである。成果は以下の通り3点にまとめられる。

（1）乳児院及び児童養護施設における継続的なインタビュー調査とその分析

近年多くの施設が家庭的な養育環境を目指し、大舎制から小規模グループホームへの建て替

えやユニット制の導入を行っている。とりわけ乳児院においては養育体制の見直しが急速に進んでいる。本研究では、小規模ユニット制を開始した乳児院の職員へのインタビューから、職員と子どもの個別の関わりを軸に展開される個別的養育と、職員同士のチームワークによって展開される共同的養育がどのような関係構造の中で実践されているのかを明らかにした。すなわち、社会的養護施設において、家庭的養育へと向かう乳児院の職員の実践を、個々のユニットにおける担当の子どもとの緊密な関わりを中心とする日々の養育（個別的養育）と、チームワークの中で役割を切り分けながら、その都度自分の分担を引き受けていく施設の一員としての実践（共同的養育）の双方から分析した。さらに、乳児院の職員が、子どもの家庭復帰、あるいは児童養護施設への措置変更に際して、子どもの将来を見通す長期的な視点を持ち、退所後の発達を踏まえた養育を展望する様子を、乳児院の養育におけるパースペクティブの転換としてまとめた。また、コロナ禍において施設養育が危機に直面する中、福祉心理学の視点から必要な現状分析を行うため、施設職員へのインタビューを行った。さらに乳幼児期の代替養育に関する理論的基盤を整理するため、イギリスの精神分析家ウィニコットの母子関係の理論および代替養育の理論のレビューを行った。以上の成果の一部は論文としてまとめられ、『福祉心理学研究』や『大阪樟蔭女子大学研究紀要』等の学術誌に掲載された。

（２）国内外の子育て支援施設の調査

国際的視野に立って社会的養護及び子育て支援の実践を考察するため、海外調査（フランス）を実施した。芸術活動や子育て相談などの機能を備えた子育て支援施設、精神分析・心理学の専門家と連携しながら運営される地域の母子支援施設、文化施設に併設されている居場所事業所などを訪れ、職員へのインタビューを通じてその運営や制度に関する知見を得た。具体的には、フランスの子育て支援の重要な理念として「socialization」と「prevention」の両者が掲げられ、前者は養育者の社会的なつながりの創出に関するもの、後者は孤立を未然に防いでいくための理念として機能していることが明らかになった。これらの理念の成立に関する文化的背景を分析することで、日本の子育て支援への示唆を展開することが可能となる。また、日本国内の先駆的事例についての調査をするため、西日本にある乳児院と、里親事業を行う NPO 法人でのフィールドワークを実施し、職員へのインタビューを行った。この結果、特に乳幼児期における社会的養護の役割及び里親と乳児院の連携に向けた考察を進めることができた。

（３）施設保育士及び保育学生の専門性発達の分析

保育士養成課程において、保育学生（特に将来施設保育士を目指す学生）に、子ども家庭福祉の視点をいかに導入し定着させるかについて焦点を当て、特に、子どもの権利や最善の利益の保障、保護者や社会資源との連携といった保育ソーシャルワークの視点をいかに指導するかについての分析を行った。本分析は、保育士養成課程から現場（特に児童福祉施設）への就職、専門職としての発達という一連のライフステージに位置づくものとして保育士の実践を捉え直すという、今後の研究の展望を開くものである。成果は『大阪樟蔭女子大学研究紀要』及び共著書に掲載された。

以上の通り本研究では、乳児院、児童養護施設、里親等の社会的養育の調査に基づき、「家庭的養育」の意味を再考し、またそれを実現させる養育者の専門性について解明してきた。以上の成果は社会的養育の文脈のみならず、保育現場等で特別な配慮を必要とする子ども及び家庭への支援、特に子ども虐待や子どもの貧困への対応及び支援についても展開しうるものである（本洞察については共著書において発表済み）。今後、子どもの最善の利益の保障という、幼児教育や保育に関わる根本的な理念を改めて吟味し、それを可能にする実践的な関わりを構想することが期待される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 奥井菜穂子, 田邊美香	4. 巻 14
2. 論文標題 保育士養成課程におけるソーシャルワークの視点の導入についての課題と展望－「受容」と「社会資源の連携」をめぐる保育学生の理解の分析をもとに	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 大阪樟蔭女子大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 159-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 奥井菜穂子	4. 巻 19
2. 論文標題 COVID-19感染拡大下における施設養育と福祉心理学に求められる役割	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福祉心理学研究	6. 最初と最後の頁 14-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 奥井菜穂子	4. 巻 18
2. 論文標題 小規模化を進める乳児院の養育における個別性と共同性－職員へのインタビュー調査による語りの分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福祉心理学研究	6. 最初と最後の頁 42-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 奥井菜穂子	4. 巻 11
2. 論文標題 フランスにおける妊娠・出産・子育て期を通した切れ目ない支援－La Protection Maternelle et Infantile (PMI) の役割に着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 子ども研究	6. 最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 奥井菜穂子	4. 巻 11
2. 論文標題 乳児院職員の語りからとらえる養育のパースペクティブ：子どもの将来を見据えた今	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大阪樟蔭女子大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 87-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 奥井菜穂子	4. 巻 10
2. 論文標題 ウィニコットの「促進的環境」と施設養育	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 子ども研究	6. 最初と最後の頁 44-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 網野武博，奥井菜穂子，倉光晃子，石井涼子，井出智博，大原天青
2. 発表標題 covid-19の感染拡大と福祉心理学－各領域からの実践、研究をもとに福祉心理学の役割を考える－
3. 学会等名 日本福祉心理学会第19回大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 奥井菜穂子
2. 発表標題 施設はいかにして「家庭的」になるのか 乳児院の職員へのインタビューより
3. 学会等名 日本質的心理学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 佐野美奈, 小林みどり, 田谷千江子, 奥井菜穂子, 中山美佐	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 176
3. 書名 乳幼児保育における遊びの環境と援助ー主体的な学びを導くために	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------